

# 日露の異言語教育現場から見るレアリア<sup>1</sup>

小林 潔

キーワード：日本語教育，ロシア語教育，教科書，レアリア，異文化

## 1: はじめに

日本に於けるロシア語教育，ロシアに於ける日本語教育という二つの教育現場での体験から異言語教育を考えたい。この場合の教育のありうる形態は，

日本に於けるロシア語教育／ロシアに於ける日本語教育

母語話者による日本語教育／母語話者によるロシア語教育<sup>2</sup>

異言語話者によるロシア語教育／異言語話者による日本語教育

それぞれの専攻課程／非専攻課程

であるが，報告者の場合は，日本に於ける異言語話者によるロシア語教育（専攻課程／非専攻課程），ロシアに於ける母語話者による日本語教育（専攻課程／非専攻課程）の2つを経験している<sup>3</sup>。このうち日本に於けるロシア語教育，特に非専攻課程については所謂第2外国語のそれとして共通の理解があろう。その他に専攻課程があり，民間の教育機関があり，近年では，日本在住のロシア人の子弟を対象とした継承語教育もある。

ロシアの日本語教育にも複数ある。報告者が勤務したアストラハン大学にも専攻課程が置かれ，非専攻課程の授業も存在する。年少者向け講座も設けられ，街の私塾でも講じられている。個人授業や独学といった形態もある。他都市では様々な組織が企画する市民講座もあろう。但し，ロシア連邦南部連邦管区アストラハン州，人口50万人の州都アストラハンにあって，一般的に，日本に関する知識はあやふやである。日本のものとしてトヨタやニッサンの他，サムスンやヒュンダイを挙げる人は大学教員の中にもいる。

さて，異言語教育が行われる教場は異文化接触の場であり，教師・教材・学習者が交差し，レアリアを含めた異文化の理解と内省が求められる。異言語話者学習者にとって異文化やレアリアを具現しているのは何よりも教科書であり，母語話者教師である。一方で，母語話者教師にとっての異文化は異言語話者学習者であり，彼等が学ぶ環境である。ロシ

---

<sup>1</sup> 本稿は，2014年度神奈川大学国際交流事業「シンポジウム・ユーラシアを研究する『言語教育におけるレアリア～ロシア話と日本語』」（2014年7月12日於神奈川大学）での同名の口頭報告に若干の加筆をし，体裁をあらためたものである。

<sup>2</sup> 以下，「日本人」を日本語母語話者，「ロシア人」をロシア語母語話者の意とする。

<sup>3</sup> 2012年9月～2014年6月，ロシア連邦国立アストラハン大学外国語学部東洋語学科にて日本語講師をつとめた。

ア人日本語学習者にとっては教科書や日本人が異文化の体現者であり、日本人日本語教師にとってはロシア人学習者との接触や教育施設が異文化体験のフィールドである。

ここで、言語教育を考える場合の出発点として、関連する諸事情の認識が必要だと思われる。レアリアを論じる場合もその上での話となろう。そうした事項としては、上記の教授者・学習者のほか、

教授・学習環境および使用環境

教授および習得の目的

学習対象言語と学習者の母語との距離

といったものが挙げられよう。ロシア人が日本語を日本で学ぶのとロシアで学ぶのとでは違う。日本文化センターといったものがあり実際に日本人がいるモスクワのような大都市で学ぶのか、日本人定住者が皆無に近い地方都市で学ぶのかでも違う。こうした違いはインターネットでも埋めることができない。また、教師にも学習者にもそれぞれの教え／学びの文化というものがあり、日本とロシアとでは異なる。ビリーフも学習戦略も異なる。ロシアには予習や履修登録という概念がない。学生は指定された科目を履修し、教師が宿題・自宅学習として指示する課題をこなしていく。成績評価のシステムも成績に対する感覚も違っている。学習目的もどのような側面を重視するか、リソースが限られている場合、何を犠牲にするか、正確さ、流暢さ、発音といったものの何を重視するのか、直ちに様々な事情が思い浮かぶ。彼我の母語の距離も大きなファクターで、おそらく学習対象言語と母語に合わせた戦略を採らねばなるまい。

その上でのレアリアであるが、「ことばの教育の現場で使う『本物』」「実際の生活で使われているもの」<sup>4</sup>とするのが一般的ではあろうが、ここでは、日本のロシア語業界での定義も採用したい。即ち、

レアリアとは、外国語を学習する際に現れて、その言語の文化的背景をなしている様々な事象の総体である。〔……〕レアリアとは外国語の学習時に現れて、その言語を使っている民族に特徴的な文化状況（社会、歴史、風土、生活習慣など）を反映する個々の事柄とその総体〔……〕<sup>5</sup>

戸辺は「『ことばを学ぶ』ことと『文化を知る』ことは相関関係にあり、レアリアのない“語学”は学ぶ者にとって無味乾燥で退屈な学習対象に過ぎないと考えている」<sup>6</sup>。これを踏まえて学習に即して言えば、レアリアとは、異言語の学習者・使用者が学習や使用で留意すべき事柄、と捉えられる。現実との関わりでその土地に特徴的な状況を反映し、

---

<sup>4</sup> 坪山，築島(2010：37)

<sup>5</sup> 戸辺(1996:48)

<sup>6</sup> 戸辺(1996:46)

異言語話者がその土地の言語を学習したり使用したりする場合に留意すべき事柄である。ここでレアリアは、挨拶の言葉のように文化習慣の違いに基づくものから、個別の事情、使用の場に左右される大小さまざまな物事まで多岐にわたる。

例としては、他言語には概念がなく一義的な対応語がない事象が挙げられる。ロシアの「お湯工場」（温水は大きな工場で湧かされ、水道管で町全体に供給される）、日本の「履修登録」（ロシアでは基本的に履修すべき科目は決まっているので学生が選択して登録するということがない）は理解しがたいだろう。「Как дела?」「失礼します」「お願いします」など挨拶の言葉も一義的な対応はない。また敬意表現あるいは会話のマナーに関わる名前の呼び方もそうで、ロシア語では会話で相手の名前を呼ぶことが一種の敬語になっている。

双方の言語と使用環境に類似のものがあったとしても完全に同一ではないことも常にある。日露双方に地下鉄はあるが、乗車システムは異なりそれぞれ相手の国のものとはとっさに分からない。ホームに入る時と出る時の二度、切符なりカードなりを使うというのはロシア人にとっては意外である。従って「改札」の意が彼我で違うわけである。道路も日露双方で自動車が走っているが、走行する側は異なる。道路を横切る時に日本で言う「右見て左見て手を挙げて」も日本では車は道路の左側を通るということを知っていなければ理解できないのである。

当然ながら、訳語を定めがたい、あるいは、訳語があっても表し尽くしているものではない事象もある。土地ならではのものでもある。アストラハンでの例を挙げれば、мошка——初夏の一時期に現れる小さな虫——がある。また ягода（日本では漿果と訳される）。アストラハン名産の西瓜も ягода だが、その西瓜も彼我で違いが見られる。

訳語として正しくとも土地ならではの事情を踏まえねばならぬ事柄もある。アストラハンでいえば河の左岸右岸は生活上重要で、河川を上流から下流に向かって眺めた時、右側が右岸、左側が左岸であるが、停電断水の告知などで自分がどちらにいるか常に意識させられる。また、アストラハンの日本語学習者は外気温+30度でも日本語で「今日は暖かい」と言うが、気温が40度ぐらいになることもあることを鑑みれば、30度は「暖かい」と言っても間違いではない。

レアリアは時代とともに変わる。「時計が進んでいる／遅れている」という表現は、嘗てのロシア語教材には必ず出てきたが、安物の時計でもそうは狂わない現代では、この表現を生み出したレアリアも消えたとして良いだろう。

このような知識は異言語学習を促進し、異言語の適切な使用を助ける。しかし、言語の学習は、実地体験すれば済む話ではない（「百聞は一見にしかず」の限界）。レアリアを詳しく知っていても異言語が習得しがたいことはままある。例えば、アストラハンにも日本の武道に取り組む者はいて、道場でつかわれる日本語（「礼」「止め」「取り」「受け」等々）を場に依じて的確に使っており事象としては知っているが、だからといって「有り難うございます」と「有り難うございました」の違いを理解しているわけではない。

レアリアの知識が先入観となって教師と学習者の目を曇らせることもある。ステレオタイプの強化であり現実的な陥穽でもある。異言語話者は、中途半端なレアリアの知識でもその国での生活が出来てしまうので、しばしば学習が停滞してしまうのである（「視れども見えず」）。我々の近くでそのような実例を挙げるのは容易い。

## 2:レアリアと日露の教科書

レアリアなる概念はソ連時代からの *страноведение*<sup>7</sup>の流れに置かれる。確認しておく。

1970年代初頭からソ連では、言語学的地域文化研究が発展した（cf. Vereščagin/Kostomarov 1973, 1976, 1983, 1990）。それは、一般地域文化研究とは互いに異なるものでありかつ補うものとされ、（異）言語を用いた教育でロシア民族のナショナルな文化の現在と過去を教授する内容でありメソッドである。それゆえ、一方では、組織的学術知識——この習得に民族言語の知識は必ずしも前提とされない——の総体である一般地域文化研究と相互に関連している。他方で、一般地域文化研究とは対立するものでもある。言語自身が担う情報は基本的に、厳密に学術的な知識ではなく、日常の知識に属するものだからである。方法論上の基本原則として挙げられるのは特に以下のものである。——言語に社会的性格があることは、外国人を新たな現実と馴染ませる客観的可能性があることを意味する。ここで言語は、コミュニケーション（情報を取り交わす）、累積的な（知識を蓄える）、直接的な（人格を形成する）機能を持つ。

——言語の教授プロセスと習得プロセスは、同時に、順応プロセスでもある。

——異言語教育プロセスは総体的で均質である。すなわち、地域文化研究の情報は、自然な形の言語、教育テキストからもたらされる。したがって、その情報が外から、人工的で、（言語に関して）より外的な経路でもたらされてはならない。<sup>8</sup>

換言すれば、異言語学習者が言語を通して新たな世界を知り、その世界に順応した新たな自分になる、そのプロセスは、言語そのもの、テキストからの情報で進む、ということである。何か明示的に享受されるような形式知ではなく、テキストとの体験を通して察することによって得られる暗黙知であるべきだ、と言えるかもしれない。現実問題としても、ある言語のレアリアを別の言語で説明するのは難しく誤解のもととなる。また、レアリアを単独であげても単なる事項の知識で終わるし、ステレオタイプの再生産にもつながるものである。日本のことを日本人がロシア語で説明するのは誤解を招くだろうし、日本人教師が日本語でロシアのレアリアを解説しても単なる紹介か雑談に終わりがちである。教師の異言語運用能力が学習を規定してはならないので、テキストから察してもらうしかない。

<sup>7</sup> 「地域文化研究」などと訳される。ドイツ語で言う“Landeskunde”。

<sup>8</sup> ブラント(2010:70).言及されている文献の書誌は割愛。

なお、最終的な教育・習得目標を言語とするか文化（新たな世界・価値観の習得）とするかコミュニケーションとするかは諸家により見解を異にするが、異言語を学びコミュニケーションを通して異文化を知り更にコミュニケーションを行って文化を知り言語を学び、と三者の相互関係の中でそれぞれが有機的に向上していきることがありうべき道と思われる。

ここで教育テキストの集積である教科書が重要になる。そのテキストはなるだけ自然な形・オーセンティックなものでなければならないだろう。異文化やレアリアを具現しているのは何よりも教科書（とネイティブ教師）であり、習得目的も内容も方法も教科書に左右される。その上で学習者は各自、見聞を広めていくことになる。「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」という格言はあるが、しかし、何よりも教科書に沿って教えるべきであろう。「教科書で」と意気込んで何か大事なものを落とすよりは「教科書を」愚直に教えた方がよい。教科書はプログラムと内容があって構成されているもので、何かを省略したり順番を変えたりすることは、学習に於いて何らかの欠落を作る。教科書に従うべきである。そして、従うに値する良い教科書を選ぶことが大事で、ベストの教科書がないのならば使用する教科書を吟味し、その利点欠点を知ることが求められる。当然ながら、学習者の母語を考慮しかつ誤りのない教科書が一番だが、完璧な教科書は存在しない。その次が本国の教科書、つまり、日本の日本語教科書、ロシアのロシア語教科書であろう（教科書のテキストは学習対象言語の手本とならねばならないが、本国のものならば、ネイティブには不自然かもしれないが、ともかく間違っではない蓋然性が高い）。しかし、本国のものを使おうとしてもうまくいかないことは多い。学習者全員分を調達できるかという問題があり、教師がそれで習っていないから用いられないという理由もままある。学習者が必ずしも学習言語の本国でのみで習った言語を使うわけではないという事情もある。例えば、ロシアで日本語を使うという事態に日本製の日本語教科書は対応しきれていない。

日本語教科書の場合だと、日本で刊行されたもの、ロシアで作成されたものがあり、ロシアの大学では課程の規定もありロシア製のものに取り組んでいる。後述するが、そうした教科書にも日本に関する一定量のレアリアが提供されている。それが日本および日本語の学習にとって有益なのは確かだが、誤記も不備もあるうえ、そもそも提供されているものだけでは不十分である。ロシアについて日本語で書かれたテキストも掲載されているが、ロシアの一面のみの紹介である。かといって、日本の教科書を用いれば良いわけでもない。日本のレアリアを踏まえた日本製教科書は日本で学ぶ学習者にとっては効果的だと思われるが、日本語環境の外で学ぶのは難しいという非効率的である。視聴覚機器・ICTを活用してもあえて学ぶのは労多くして功少なし（やはり「百聞は一見にしかず」）。日本人ネイティブが教えてもすらすら行かない。学習者の学習文化が大きく影響し、日本製の教科書が求める学習方法が受け入れられないことも多い。ロシア語教育でも、ロシア本国の教科書と日本で作成された教科書があり、レアリアの観点では前者がロシア本国の事柄についてのテキストをより多く含むが、日本人ロシア語学習者に効果がないことがある。

報告者自身の体験を挙げれば、初級クラスでの嶋田和子『できる日本語』<sup>9</sup>の使用は失敗であった。日本語で何ができるかを重視した最新の言語教育観、ACTFL-OPIやCEFRへの目配り、著者達の長年に実践に基づいた工夫、関連教材の整備、と教科書自体は素晴らしいもので、複数の言語的背景を持つ異言語話者たちが日本で暮らしながらともに学ぶには良いものだと確信する。しかし、ロシア語話者しかいないロシアの教室で取り組んでも学んだことが生きる場はなかったのである。ロシア人学生の学習に対するピリーフとも合わない。異言語環境にあっては、日本語で何ができるかよりも、文法や漢字を覚えることの方が大切とも言える。もっとも学習者の思いに寄り添えばうまくいくわけでもない。言語のタイプが日本語とロシア語でかけ離れている以上、ロシアの学習文化で学びうるようには日本語はなっていないのであって(イタリア語やドイツ語とは違う)、どこかでうまく学習者は言語学習への構えを変える必要があるし、教師もそう導くべきであろう。

そもそも、教科書の「イデオロギー」に自覚的であるべきである。この辺りは既に教師への戒めとして明示されている。

初級の教科書の日本に関することばには、教科書を作った人の文化に対する考え方が表れています。また、日本国内で作られた教科書では、その教科書を作った人たちやその教科書を使う人たちにとって身近な場所やことがらを取り上げられています。ですから、日本で出版された教科書を海外で使う場合、そこに出ている「日本に関係あることば」をすべて教えることが、自分の学習者にとって、どのような利点と問題があるのか、もう一度考える必要があります。[……]日本語の授業で使っている教科書に、日本に関するどのようなことばが入っているのか、それを教える必要があるのか、それだけを教えればいいのか、もう一度考えてみましょう<sup>10</sup>。

ロシアで作られた日本語教科書はどうか。定番とされているネチャーエワの教科書<sup>11</sup>を見てみよう。初級の他に中級(読解)、会話、漢字編があり総合的な教科書である。その初級教科書は2分冊30課。500時間=250コマの学習時間を想定し、語彙は2600単位590字である。欠点は多い。夥しい誤植、単語の明らかな誤記、「毎日のじゅぎょうは日本語ですか」や「夏休みの時に」といった奇妙な日本語、解説された文法項目では解けない、あるいは当てはめると非文になってしまう練習問題、形式上は確かにそうなるが機能の点ではまったく違う訳文、そもそも学習者にとって不親切な紙面デザイン、不適切なフォントなどである。真面目に勉強したからといって日本語能力検定試験に合格するわけでもない(想定としているものが異なる)。だが、日本と日本語について一通りは見渡せるようにな

---

<sup>9</sup> 嶋田(2011)

<sup>10</sup> 坪山, 築島(2010:23)

<sup>11</sup> 本稿で対象とする初級教科書は Нечаева Л.Т. и др. (2002)

っている。最初の数課には文字や音韻の解説があり、その後、アンナとセルゲイというロシア人の二人の若者が、明子をはじめとする複数の日本人と関わりながら、東京で留学生として暮らし学んでいくという設定で進行する。関西に旅行に行ったり大学でレポートを書いたりという設定で、地理や歴史もトピックとして挙がる。後半 19 課からはロシアに関する日本語のテキストも示される。テーマやトピックを列挙すると、

第 6 課 自己紹介、やりとり

第 7 課 教室にあるもの

第 8 課 教室

第 9 課 大学の教室

第 10 課 学生の 1 日

第 11 課 ステイ先の家

第 12 課 日本語の授業

第 13 課 果物屋・喫茶店

第 14 課 自己紹介・家族

第 15 課 上野公園

第 16 課 アンナの部屋

第 17 課 セルゲイの一日 浅草、通学・門限

第 18 課 病気

第 19 課 季節（各月 四季）

ロシアの気候

第 20 課 本屋（神田）

モスクワでの通勤 街の説明

第 21 課 日本の地理・旅行の行き先

ロシアの地理

第 22 課 旅行のための買い物 デパート

ロシアの名産 プラトーク

名産、衣服、デパート

第 23 課 新幹線 東京から京都

電車旅行

第 24 課 京都観光

ペテルブルク

第 25 課 インタビュー（スポーツに関するアンケート調査）

ロシアのスポーツ

第 26 課 日本料理

ロシアの料理

第 27 課 東京の観光 皇居前広場 日比谷 国会議事堂 東京国立近代美術館 都庁  
モスクワ

第 28 課 日本のサービス, 家電, レンタルサービス, チケットサービス, ハウスクリーニング  
ケータリング, シルバー向け 美容院

第 29 課 日本の祝祭日  
ロシアの祝祭日

第 30 課 日本の政治制度 国会 日本国憲法  
ロシア連邦の政治制度

このようなレアリアを教えることは学習者にとって「どのような利点と問題があるのか」。学習の実質面でもロシアで日本語に通じたロシア人と呼ばれる為にもネチャーエワの提供するものをまずは見て良いのだろう。個々の問題箇所はある。神田に本を買いに行くなら神田駅ではなくて神保町に行く, 鉄道の切符売り場はなにもかも「みどりの窓口」ではなく JR だけの呼称, 新幹線も電車と言って良い, ご飯を炊くのなら鍋ではなく釜を用いる等々の訂正したい記述は散見される。日本人の名字を並べているのも不可解で, 学習者がどんな名字の日本人に人生で出会すか教科書で想定できるわけではない(もちろん, 姓から様々な話にもっていける)。情報の鮮度という点でも問題で, 祝祭日, 政治制度などは刊行時と変わっていて, 多くの祝日は固定の日ではなくなった。国会議員の定数も変わった。既に教科書の記述と現実とに齟齬がある。

ではテレビドラマやインターネットを使って最新の情報を入れれば良いのか, というわけでもない。戸辺は言う。「外国語の知識や運用能力を拡大するためにこそ, 対象国(地域)の社会・政治・経済・歴史・地理・宗教・風俗習慣など, さまざまな分野にわたる知識に裏付けられた外国語こそ, レベルの高い, 内容の豊かなものと言えるのである。」<sup>12</sup> 然り。だからこそネチャーエワの教科書には一定量のレアリアが提供されており, それは日本および日本語の学習とその「レベルの高い, 内容の豊かな」使用にとって必要と想定されている。誤記も不備もあり, 十分でもないが, 目指すところは明らかである。

### 3:教科書の問題点

むしろ問題は以下の2点である。

1: 学習者は学習言語の本国のみで習った言語を使うわけではない。これは教科書で必ずしも配慮されていない。異言語学習の醍醐味はもとよりそれを通して新しい世界・異文化を知ることではあるが, ロシア人がロシアでロシアについて日本語で, 日本人が日本で日本

---

<sup>12</sup> 戸辺(1999:45)

についてロシア語で語ることを求められることは実は多い。この点、ロシアでのロシア人の日本語使用をも考えた試みとしてネチャーエワの教科書を評価しよう。

2: 学習言語の本国のそもそもの多様性や、言語の国際性が反映されていないうらみがある。つまり、教科書に本国志向やある特定文化への志向があつて、テキストが役立たない。

両者は繋がりがあつて、学習対象の言語で自らの文化なり国なりを説明すること——ロシア人がロシアについて日本語で語る、日本人が日本についてロシア語で語る——には自文化の多様性の認識が伴わなければならない。「教師は、日本と自国の違いからわかる多様性だけではなく、日本にも自国にもさまざまな立場や意見があることに気づかせること、違う立場や意見に対して嫌悪感や拒否感を持たずに背景を思いやり、考えるように導くことが大切です。」<sup>13</sup>

この点、日本のロシア語教科書もネチャーエワの日本語教科書でのロシア記述も難有りと言わざるを得ない。ロシアは多民族国家である。ネチャーエワの教科書はロシア語話者を対象としているが、ロシア語話者はロシア民族だけでもないし、ロシア正教徒だけでもない。モスクワだけに住んでいるのでもない。ネチャーエワの教科書ではロシアの祝日の例として1月7日のクリスマスを解説した日本語テキストを掲載しており、これはこれで良いが、ロシアにはイスラム教徒のロシア国民日本語学習者もいる。彼等にとっては当該のクリスマスのテキストはあまり役立たない。イスラム教の祝日についてのテキストが必要である。そのようなテキストの作成もこれまた難しい。ロシアにも仏教徒はいるが、しかし、日本人で仏教徒たる報告者は彼等の表現のための日本語テキストを書くことができない。教理も儀式も仏陀の誕生日も彼我で違うからである。

現在、ロシア語でも日本語でも、その「国際化」が議論されている。非母語話者が当該言語をますます使うようになって、非母語話者・母語話者間の使用だけでなく、非母語話者間の使用（ロシア語母語話者と中国語母語話者が日本語で会話）するようにもなった。日本の国際化以上に日本語の国際化が進んでいるという指摘が既にある（当の日本人よりも先に日本語という言語が国境を越えて用いられるようになり『国際化』してしまった）<sup>14</sup>。日本語そのものも変わっており、年配者が路上で若者達の言葉を聞いて、直ちに日本語だと判別できないことも珍しくない。一方、ロシア語はロシア語でロシア連邦以外でも使われる言語である。その言語で表されることはロシア国内のことだけではない。

しかるに、ロシアで導入された移民・外国人労働者対象の試験（2015年よりロシアでは、永住許可、滞在許可、就労許可、特許の申請を希望する外国人に対して、ロシア語・ロシア史・法律の試験が義務付けられた）では、明確な同化志向があるようである<sup>15</sup>。本国に

---

<sup>13</sup> 坪山, 築島(2010:57)

<sup>14</sup> 荒川(2009:238)

<sup>15</sup> 既に、どのような「要求」が課されるかを示した書籍も出版されている。

[http://www.gramota.ru/lenta/news/8\\_3020](http://www.gramota.ru/lenta/news/8_3020). 今後の検討が俟たれる。

同化志向があるならば、教科書と教師はそれに対応しなければならない。

この点、国際語としての地位を揺るぎないものとしている英語では、本国以外のトピックを堂々と扱っている。英語の教科書なら、たとえばアフリカの飢餓問題を扱っているだろう。ロシア語の教科書や日本語の教科書は、ロシアで作られたものであれば日本で作られたものであれば本国製のものは明確な本国志向がある。その教科書は、何よりも日本語が話されている日本に関わるため、ロシア語を話しているロシア人と関わるために作られているのだ。もっとも、英語教育には倒錯がある。日本人はロシアについて知りたいからロシア語を学ぶのだが、英語学習の場合は、イギリスについて知りたいから英語を学ぶというよりも、英語ができるようになりたいから英米文化を学ぶ、という逆向きである。

言語の国際化のもとでは教科書の本国志向は問題にされるべきである。ならば、語学教育はレアリア抜きとするか、別の、より国際性のある「高次の」レアリア——そのようなものは既にレアリアとは呼べないかもしれない——を含んだ教科書を用いるようになるのか。文化と切れた言語は可能かという永遠の問題がある。エスペランチストや World Englishes<sup>16</sup>の推進者は然りと言うだろう。もし、ロシア語なり日本語なりが国際語を目指すのなら、そして、自分の文化を押しつけることをよしとしなければ、どこかでドメスティックな文化を切らねばならない。国際語ならレアリア抜き、あるいは何かユニヴァーサルな文化——それは既に文明と呼ぶべきか——のレアリアが必要ということになるだろう。

#### 4: 終わりに

既にソ連の страноведение で指摘されていたように、言語を離れてレアリアのみを単独で教示することはできない。大学の「ロシア文化論」「地域研究」といった科目はまた別の話である。一方で、言語は技法であり芸であり体操や踊りと同じ性格を持つ。習得にはある程度の覚悟と練習が必要である。ことばの習得をなめないということで、これは日本語教育界でも指摘されている<sup>17</sup>。ロシア語教師の戸辺も「レアリアの知識は、あくまで語学の学習を補完するものと位置付けるべきである」<sup>18</sup>とする。

言語そのものの学習もレアリアを増やしていく見聞にも終わりはない。どの言語を使うにしても、母語であっても異言語であっても、自分の知識では間に合わないことは常に想定されるし、不適切な使用も免れがたい。人は周りに助けてもらい許されながら言語を学び使っていくのだが、異言語学習にはその認識が特に必要である。ロシア人は日本人のロシア語を許し、日本人はロシア人の日本語を許す、そのような環境でなければ語学学習は難しい。どんなに勉強しても、おそらく異言語と異言語の文化の全てを習得することはで

<sup>16</sup> Kachru(1985)などから始まる議論を念頭に置いている。

<sup>17</sup> 「[……] 基礎段階では、実際の生活に役に立つような言語運用能力を求めるのは無理だということ。基礎段階では、やはり日本語の『言葉』を増やすことが、重要だと思う。『言葉の習得』を軽視するのは、大きな誤りです。」西口(2011:39-40)

<sup>18</sup> 戸辺(1999:53)

きない。母語でさえ難しい。学校の勉強を全てやり、教科書を隅から隅まで覚えても足りないし、ネイティブのようにできるようになるわけではない。だから、異言語の学習と並んで、異文化に対する対応能力を育てる必要がある<sup>19</sup>。そして、そのような能力は異言語学習が育成するのであり、育成された異文化間能力はまた異言語学習を促す。レアリアはそうした循環の一つのファクターである。異言語を習い使うということは、新しい世界に参入すべくあえて自ら不便を担ってみることである。不便があることは全く罪ではないが、実際にこれができないあれができないという事態は常に生じる。現実社会で人々は自らの活動のためにいろいろな場所に助けを作っておくが、異言語話者も自らの限界を自覚し母語話者との協働を模索すべきだろう。

---

<sup>19</sup> 2015年には文化能力と異文化間能力に関する増補をしたCEFR新版が刊行予定とのこと（西山教行 Twitter（2014年12月21日）による）。

## 参考文献

- Kachru, B. 1985. "Standards, codification and sociolinguistic realism: The English Language in the outer circle," in *English in the World: Teaching and learning the language and literature*, Ed. by R.Quirk and H.G.Widdowson, Cambridge: Cambridge University Press, pp.11-30.
- Нечаева Л.Т. и др. 2002. *Японский язык для начинающих. Часть первая, Часть вторая.* (Новая редакция), М.: Московский лицей.
- 荒川洋平. 2009. 『日本語という外国語』. 講談社.
- 嶋田和子〔監修〕・できる日本語教材開発プロジェクト. 2011. 『できる日本語 初級』. アルク.
- 坪山由美子, 築島史恵. 2010. 『日本事情・日本文化を教える』(国際交流基金 日本語教授法シリーズ第11巻). ひつじ書房.
- 戸辺又方. 1999. 「ロシア語教育におけるレアリア —外国語教育の一視点—」, 『北九州大学外国語学部紀要』96, pp.45-54.
- 西口光一. 2011. 「日本語教育のイノベーションは可能か」〔神吉宇一との対談〕, 『月刊日本語』(アルク) 24-2, pp.38-40.
- ブランド・ベルトルト. 2010. 「ロシア語を異言語として教授すること——ロシア語教育概観——」, 『ロシア語研究 《木二会》年報』22(2009), pp. 53-79. 小林潔〔翻訳〕, 原著は Brandt, Bertolt. 1999. "Vermittlung des Russischen als Fremdsprache," in *Handbuch der sprachwissenschaftlichen Russistik und ihrer Grenzdisziplinen*, Hrg. von Helmut Jachnow; unter Mitarbeit von Sabine Dönninghaus et al., Wiesbaden: Harrassowitz, Slavistische Studienbücher, n.F., Bd. 8., S. 1215-1244.